

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 修士論文概要書

## 論文題目

「停滞」する地域日本語教室における学習者  
の経験

一人一人の学習者は何を求め何を得たか

長谷川 浩

2023年 9月

## 第1章 問題の所在

筆者は地方の県で、20年間に5か所の地域日本語教室でボランティアを行なってきた。その間、それぞれの教室の様々な違いを感じる一方、多くの教室で、不安定就労などにより学習者の参加がままならない状態をみてきた。現在参加しているY町日本語教室も、参加者が定着せず、加えてコロナによる参加者の減少などの課題を抱えている。ここから、地域日本語教室の現状と問題点、そして可能ならば改善策を考えたいと思い研究を開始した。その際には今までの経験から、地域日本語教室が多様な存在であること、学習者も一人一人が様々な個性をもった個人であることを基礎に、研究を進めたいと考えた。

## 第2章 先行研究

地域日本語教育研究について、場のあり方と参加者の二つの面から、いくつかの先行研究を概観した。

米勢治子(2006)：地域日本語教室を諸条件から類型化、条件に恵まれない教室は存亡の危機。

池上(2011)：個体主義能力観批判、コミュニケーション力の育成。

野山ほか(2006)：5つの役割(居場所、交流、地域参加、国際理解、日本語学習)、居場所を重視。

ヤン(2012)：学習者の期待は不利益克服のための道具的動機付け、日本語能力向上を主張。

黄(2021)：不利な状況に置かれている学習者に焦点、居場所の役割

周(2009)：不満をもってやめた学習者に焦点、教室＝計画性・系統性なし、ボラ＝責任感・専門性なし。

## 第3章 地域日本語教育のすがた

いくつかの都県の地域日本語教育実態調査から、地域日本語教育の全体的な状況について概観した。

## 第4章 研究対象と研究課題

### 4-1 Y町日本語教室

3章の地域日本語教育全体の状況との比較から、Y町日本語教室は、就労を目的とした人が極めて多いこと、また規模は全体の平均程度だが、学習者の出席率が低い。また筆者の参加経験から、学習者が登録して何回かは参加するが、やがて参加しなくなって

いくというパターンが多く見みられた。

以上の考察から、Y 町日本語教室は、学習者の参加が継続しないという課題をもっており、コロナ禍によって学習者がさらに減少し、その活動は「停滞」していると判断した。ただし活動が完全に停止したわけではなく、その間も少数の学習者・ボランティアによって活動は継続しており、その活動と学習者にとっての意味については、検討が必要と考えた。

#### 4-2 研究目的

ではこのような状態の地域日本語教室には、どのような意味があるのだろうか。第 2 章の先行研究において、地域日本語教室のあるべき姿を示そうとするものは多く、また地域日本語教室の様々な問題点を指摘する研究もみられる。しかし、問題を抱え活動が停滞している地域日本語教室は、実際に数多く存在していると思われるが、そのような教室の状況をありのままに記述し、そこを出発点として考察をすすめた研究は、管見の限り多くない。研究者の求める姿とはちがった状況ではあるが、その場がどのように運営され、どのように機能しているかを、冷静に把握することは必要ではないだろうか。またそのことが、地域日本語教育のあるべき姿につながる道を、現実的基盤から考えることにつながるのではないかと考えた。

#### 4-3 研究課題

上記から、本研究の研究課題を下のように設定する。

活動の「停滞」する地域日本語教室に参加することは、学習者にとってどのような意味があるか。

R Q 1 : 学習者は、日本の生活に何を求め、何を得ているか。

R Q 2 : 学習者は、地域日本語教室に何を求め、何を得ているか。

#### 第 5 章 研究の方法

本研究の調査方法はケーススタディ(メリアム 2004)を援用する。調査の手法としては、Y 町日本語教室の 4 名の学習者へ半構造化インタビューを行い、インタビュー記録をデータとして、その分析については、佐藤郁哉(2008)を援用し、事例ーコードマトリックスを使用する。

#### 第 6 章 調査の結果と分析

インタビューデータから事例ーコードマトリックスを作成し、事例(協力者)中心の分析とコード(カテゴリー)中心の分析を行った。ここでは、カテゴリー中心の分析のみを記

述する。

カテゴリー1：来日の目的・理由を中心とする分析：経済的利益が全員に共通しているものの、その背景や具体的目標、その他に求めるものなどで個人により大きな違いがみられる。

カテゴリー2：日本の生活のプラス面を中心とする分析：滞在期間が短いDさんを除けば、経済的利益を生活向上に利用し、それを続けるためにある程度の滞在を想定している。生活面では、滞在期間が極めて長いCさんを除けば、就業先の環境に大きく影響を受け、その状況が左右される姿が見出される。

カテゴリー3：日本の生活のマイナス面を中心とする分析：彼らの置かれた就労環境による仕事の大きな負担が存在する。同時に言葉の困難も共通しており、その背景に文化的・社会的障壁の影響が考えられる。一方でこれらの条件は個人により大きな違いがあり、Bさんのように極めて過酷な状況に追い込まれている場合もあることに注目すべきと考える。

カテゴリー4：教室参加の目的・理由を中心とする分析：4人とも日本語学習を求めて参加し、具体的な資格取得の希望をもっている。同時に全員が、双方向のやり取りを通じた言葉の学びと交流を求めている。ここでも個人の状況による違いがみられ、職業に直結する具体的目標や、より深く人間的な交流を求めるなど、様々な目的をもってそれぞれの学習者が参加していることが見出される。

カテゴリー5：教室参加のプラス面を中心とする分析：全員が参加することに楽しみを見出しており、特に過酷な状況のBさんにとって、教室への参加が精神的に重要な意味を持っていた。日本語教室が学習者にとって精神的な楽しさ、安らぎを得る場になっていることが見出された。一方で言葉の学びについては、個人の状況により、本人の認識する成果も異なることが観察された。

カテゴリー6：教室参加のその他の面を中心とする分析：カテゴリー5において全員から表出された参加による楽しみについて、個人により、それへの評価や求める程度に差があることが見出された。

カテゴリー7：日本語教室に来ない理由を中心とする分析：学習者のおかれた厳しい就労環境による仕事の負担が大きな原因と考えられるが、同時にそれを超える学習者による教室の意義づけがないことも要因と考えられる。

## 第7章 考察

R Q 1 への答え：調査協力者はいずれも経済的利益を求めて日本に来たが、その意味付けは個人により違いがある。そして就労を通じて、その利益を生活の向上に利用し、日本での生活全般に肯定的な意味付けをもっている人が多いが、それは就労環境に大きく左右されている。一方生活の中で言葉の困難を強く感じており、その背景に彼らの *audibility*(斎藤 2006)を認めない周囲の状況や、厳しい就労環境が存在すると考えられ、過酷な状況に追い込まれている場合もある。

R Q 2 への答え：協力者が共通して日本語教室に望むことは、日本語学習である。しかし同時に交流や国際理解などの複合的な希望ももっており、言葉の学びのみが目的ではない。複合的な希望の一つゆえに、参加が一定しない状態でも、日本語学習の成果に一定の評価をしている。また厳しい就労環境や彼らの *audibility* を認めない周囲の状況などを背景に、教室がすべての協力者にとって「居場所」(野本ほか 2008)としての役割を果たしている。しかし同時に、これら役割・機能は、個人々の状況により差異が大きい。

研究課題への答え：経済的利益を求めて来日・就労している協力者は、利益の利用を通じて日本での生活に肯定的な意味付けをもっているが、個人々の就労環境によって生活が大きく左右される状況に置かれている。そして厳しい就労環境や彼らの *audibility* を認めない周囲の状況により、生活の中で言葉の困難を強く感じ、「日本語学習」や「交流」などを求めて日本語教室に参加し、「居場所」と感じ一定の評価をしている。またこれらの状況は個人々により異なり、特に極端に厳しい状況に追い詰められる人にとって、教室の果たす役割はさらに大きい。

この答えが Y 町日本語教室にもつ意味を加える。地域日本語教室の意味は、学習者個人々の置かれた状況によって異なっており、求められるのは、「停滞」する教室という、教室を単位とした見方・位置付けでない。一人一人の学習者にとっての、その時点で彼らが置かれた状況の中で、その地域日本語教室に参加することにどのような意味があるか、という視点で考え対応していくべきである。

## 第 8 章 結論

### 8-1-2 地域日本語教育研究における本研究の意義

地域日本語教育研究において、本来もっとも重視されるべき学習者の声をもとにした研究が少ないという問題意識をもとに、Y 町日本語教室という個別の地域日本語教室の学習者の声を出発点として研究を行った。

本研究の結果は、米勢(2006b)が示す「恵まれない教室は、学習不在に陥り、存亡の危機に瀕することになる」(p.116)と異なる。その理由は「学習」の意味する内容であると考え。協力者としてY町日本語教室が「居場所」となっているが、それはこの教室において学習者が、「他者との関係性の中で発現する能力」(池上 2011)としての言葉のやり取りを通じて「自分が『そこにいたい』『そこにいて楽しい』『そこにいるとありのままの自分でいられる』と感じ」(野山ほか 2008)ているからであり、それが地域日本語教室における学習の姿と考える。恵まれた条件とはいえない地域日本語教室でも、学習は不在ではなく成立していると考え。

また、日本語能力を高めるといふ、ヤン(2012)の主張に対して、「獲得型の学習」(舘岡 2015)に過度に焦点化すると、学習者の状況から生まれる基本的要望を見失う可能性があることを、本研究の結果は示している。

また先行研究でみた黄(2021)や周(2009)では、特定の条件の学習者を対象に考察をおこなっている。本研究の違いは、特定の学習者を対象とするのではなく、一つの地域日本語教室に参加する、様々なタイプの学習者を対象としたことにある。実際の地域日本語教室の運営について考える場合には、本研究の結果がより参考になる場合が多いのではないかと思われる。

資料1：Y町日本語教室の学習者へのインタビュー記録に基づく事例－コードマトリックス

	1 来日(目的・理由)	2 日本の生活(プラス)	3 日本の生活(マイナス)	4 教室参加(目的・理由)	5 教室参加(プラス)	6 教室参加(その他)	7 来ない理由
A 男性 ベトナム 技能実習	①まずお金を稼ぎたい	①貯金してベトナムで家を建てる	①仕事が大変(重い/暑い/寒い/うるさい)	①日本語を勉強して仕事に慣れる	①教室は楽しい日本語の勉強できる		①仕事が忙しかった
	②日本の文化を体験したい	②会社の人と観光した	②残業が多く忙しい	②交流して文化を知りたい	②交流できて文化分かる		
		③いい会社	③最初は怒られた	③会話を多く教科書少なめに	③資格(N3)とった		
		④技能実習から特定技能へ	④日本人と話せない	④資格(N2)とりたい			
B 男性 インドネ シア 技能実習	①家族と自分の借金返済/教育費/貯蓄	①家族が土地購入/進学	①火事を出した	①生活/趣味/余暇の情報を得るために参加	①家族のように暖かく精神状態が回復	①時間が短く急いでいる	①会社に怒られたから
	②特殊技術を学び母国で高収入を	②日本語能力が高まった	②給与カット/抑圧/非人間的扱い/残業強制	②若い女性と触れ合いたい	②ボラから情報を得た/個人的交流		②残業を強制されたから
	③お金より技術を学びたい	③観光や娯楽	②体調不良(喘息)/精神不安定(不眠・摂食障害)	③個別対応で考えながら学びたい	③交流により文法/会話能力が向上		
		④技能実習から特定技能へ	③逃亡/自殺を考えた	④資格(N2)とりたい	④資格(N3)とった		
		④仕事が忙しく、同国人と交流なし					
C 男性 日系ブラ ジル 定住者	①お金を稼いで母国の借金返済/住宅購入	①母国の借金返済/住宅購入	①ずっと夜勤	①字を学んでいい仕事を得る	①職場内で仕事が変わった	①気持ちまでは変わらない	①仕事で疲労するので無理にやりたくない
	②家族も滞在させたい	②家族が日本に滞在できて将来も安心	②以心伝心で教えてくれない	②考えたり会話して字を憶える	②字を読めることで少し生活が便利に		
	③日本の生活を楽しむ	③何でも買える、観光もできる	③言葉で困ることは日常的	③資格(漢検5級)とりたい	③日本語教室は楽しい		
		④日本人/ブラジル人と楽しく交流した	④字が読めず困った				
D 女性 帯同家族	①夫と同居するため来日、自身に理由なし	①生活は楽で安全	①困難は言葉の壁	①流暢に話し、自立し交流する	①コミュニケーションできるようになった	①教室と他でコミュニケーションの差はない	②仕事のプレッシャーと冬の寒さ
	②夫は日本で留学・就職	②職場では困難なく平等	②拒絶・差別を受ける	②文化を知り溶け込むため、自由に話す	②文化と言葉の両方学べる		
	③自分は弁当工場でパート勤務	③みんな親切で楽しい	③多くの人が偏見を持っている	③会話が重要	③文化を学ぶことを楽しんでいる		
		④ルールを守る日本の文化が好き	④仕事のプレッシャーが高い	④資格(N5)とりたい			
			⑤近隣とのコミュニケーションの不足				